

【特集：廣野喜幸先生ご退職記念】

## 廣野先生がつなげてくださった縁

藤本 大士<sup>1</sup>

科哲での私の指導教官は廣野先生ではなかった。ただ、廣野先生からは授業やゼミ（通称 BMS）での指導を通じて非常に感化されたし、また、多くの研究者を紹介していただき、その縁が私の研究者としてのキャリアに大きな影響を与えてきたというのは間違いない。

私が廣野先生にはじめて会ったのは 2010 年 1 月 19 日であった。当時の私は早稲田大学人間科学部で科学史を専攻する 4 年生で、2 ヶ月後に卒業を控えていた。3 年生の頃には真面目に就職活動をしていたが、加藤茂生先生のもとで科学史を学んでいく中で、さらにこの分野のことを勉強したいと思い、4 年になると就活をやめ、大学院進学を目指すようになった。当時の私は、米本昌平・松原洋子・櫛島次郎・市野川容孝『優生学と人間社会 — 生命科学の世紀はどこへ向かうのか』（講談社現代新書、2000 年）から強い影響を受け、日本の優生学史について研究したいと考えていた。どの大学院を選ぶべきか考えて、まず 2009 年 6 月に立命館大学大学院先端総合学術研究科の松原洋子先生を訪ねた。松原先生は非常に親身になって進路相談にのっていただき、先端研だけでなく、科哲の受験も考えると良いとアドバイスをいただいた。ただ、その年の科哲の院試の出願期間は既に終わっており、また、当時は医学史よりは医療社会学に関心があったため、市野川容孝先生の所属していた東大の関連社会科学講座への進学を目指すことになった。

2010 年 2 月に実施される院試に向けて、独学で社会学を勉強しつつ、早稲田内で開講されている科学史・科学技術社会論関係の授業を聴講していた。このときに聴講した講義が、政治経済学部で科学史・科学技術社会論の非常勤講師をしていた廣野先生の講義であった。1 月 19 日の授業が終わったあと、廣野先生に医療社会学に関心があることを伝え、喫茶店に誘ってくださり、

1 ハイデルベルク大学トランスカルチュラル・スタディーズ・センター助教。

高田牧舎で1～2時間ほど相談にのっていただいた。当時の私は、日本における医学史や医療社会学の研究コミュニティや研究作法の違いについてはほとんど知らなかった。しかし、私の漠とした研究関心を廣野先生に伝えると、香西豊子さんの研究が私の関心に近いだろうとアドバイスをくださった。香西さんは『流通する「人体」— 献体・献血・臓器提供の歴史』（勁草書房、2009年）を上梓したばかりであり、廣野ゼミにも顔を出されていた。そして、廣野先生の紹介により、翌月には香西さんに進路相談にのっていただき、多くの助言をいただいた。

相關社会科学講座の院試は残念ながら不合格となり、大学院浪人をする事になった。その後、自分の研究テーマと進路について再考し、やはり廣野先生の指導を受けたいと考えるようになり、科哲への進学を目指すようになった。同時に、廣野先生も長年深く関わられていた、日本科学史学会生物学史分科会の生物学史研究会のイベントにも参加するようになった。この頃の研究会係をつとめていたのは、廣野先生の学生であった住田朋久さん（当時はD2）で、2010年4月頃に住田さんと初めて出会うことになった。住田さんと出会えたことで、廣野ゼミ、科哲、生物学史研究会の諸先輩方と知り合うことができた。そして、住田さんの紹介を通じ、科哲への進学に関心のある有志が集まる勉強会を組織することになった。この勉強会での優秀な参加者たちに刺激を受けたことで、勉強のモチベーションもあがり、幸運にも科哲に合格することができた。

しかし、ここで1つ予定外となったことがある。それが、私の指導教官が廣野先生にならなかったことである。というのも、私の代の科哲への合格者は7名で、うち森脇江介さんと高橋龍太さんが科学技術社会論を研究テーマとしており、科学史にも科学技術社会論にも対応出来る廣野先生が二人の指導教官となり、科学史を研究テーマとする私は岡本拓司先生が指導教官となったからである。その頃までには、廣野先生とはある程度交流していた一方、岡本先生とはほとんど面識がなかったので、一抹の不安を覚えた。ただ、結果的に、修士課程2年、博士課程6年の長きにわたって岡本先生からは常に丁寧な研究指導を受けることができた。私の博論は岡本先生が指導教官であったから書き上げ

ることができたと言え、そのため、このときの偶然は結果的に私にとっては良かったことだと思う。

以上の事情から、私が廣野先生から受けた指導というのは、主に廣野先生の授業やゼミであった。毎週開催される廣野ゼミでは、フーコーやルーマンなどの輪読会が開催され、その理論の理解にいつも四苦八苦した。文献のレジユメの担当となったときや自身の研究構想発表会のときは、自分の読解力のなさや研究の未熟さをいつも認識させられた。あるいは、「藤本君、フーコーといえば、何？」のような漠然とした問いがよく投げかけられ、答えに窮してしまうことも多かった。今思えば、先行研究のもっとも重要なこと、本質的な部分を瞬時に、簡潔に述べるような能力を学生に身につけさせようとしていたのだと理解している（ただ、私のそのような能力はいまだに不十分であるが）。

正直なところ、私の発表や原稿に対して、廣野先生から褒められたり、好意的な評価をいただいたりした記憶は一度もない。そのため、最終関門である博士論文審査会においても、最大の壁は廣野先生になるだろうと考えられた。実のところ、修士課程の間は、廣野ゼミに欠かさず出席し、廣野先生の授業も毎回取っていたが、博士課程進学後は、岡本先生による個人指導が主となっており、また、アメリカに長期留学していたため、審査会以前に廣野先生と博論の内容を議論したことがほとんどなかった。案の定、審査会では、廣野先生から多くの鋭い指摘を受け、適切に応答することができなかった。そのため、博士号を授与されはしたが、不完全燃焼気味であった。

その後、審査員よりいただいたコメントを参考にしながら、博論を修正し、『医学とキリスト教—日本におけるアメリカ・プロテスタントの医療宣教』（法政大学出版局、2021年）として出版した。ここでも恐れながら、廣野先生に献本した。それに対していただいたメールには、「ゼミや審査では厳しめに臨み、質問発言しますが、そうした立場を離れて率直に言えば、御著書はなかなかのものなのではないでしょうかね」と書かれていた。おそらく、これが廣野先生からの初めての好意的な評価であり、このとき、心にひっかかっていたものが流れていく感覚を得た。そして、この一言は、自らの研究に大きな自信を与えるものであり、今でも励みとなっている。

博士学位取得から現在に至る約6年の間は、研究者として独り立ちしていくためにも、科哲の恩師との連絡は意識的に減らし、自らの研究を進めてきた。その研究の1つに、医学と映画の歴史に関するものがあり、その一部を、香西豊子さんと藤原辰史さんによる共同研究プロジェクトで発表した。実のところ、私が廣野先生に最初に出会ったときにすぐに紹介して下さり、親身になって相談にのってくださった香西さんであったが、私が科哲に進学してからは、香西さんに長らく連絡をしないという不義理を働いてしまっていた。しかし、香西さんの研究プロジェクトに加えていただいたことで、この研究成果を藤原辰史・香西豊子共編『疫病と人文学—あらがひ、書きとめ、待ちうける』（岩波書店）に含めていただけた。医学と映画の歴史に関する研究は、科哲での院生時代の研究とは直接的には関係ないものであるが、思えば、この本に自分の論文が収録されているのも、廣野先生が15年前につないでくださった縁があったからである。この本は2025年2月に出版されるが、その出版が廣野先生の退官の時期に偶然重なったことを不思議に思いつつ、廣野先生のこれまでの指導と、つないでくださった多くの縁にあらためて感謝するばかりである。